

映画監督を目指し、
映像制作で起業

Fourteen Creative Films 代表 / Uターン 西村 航



筆者。フェリー「おき」を背景に。

将来の夢は映画監督

卒業文集など綴ったことはないけれど、幼い頃から心に秘めていた将来の夢、それは映画監督になることでした。

きっかけは、まだ保育園児だった時に初めて見た手品。すごく不思議で、心から驚いて、「将来は魔法使いになつて、

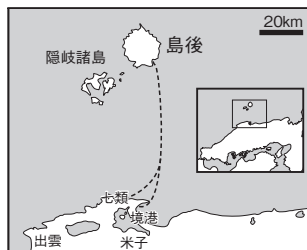
たくさんの人を楽しませたい」と思ったことを覚えています。決定的となったのが、『ネバーエンディング・ストーリー』という映画作品に出会ったこと。まさに映画は魔法の世界だ！

と感じ、「将来、映画監督になろう」と心に誓いました。小学三年生の頃です。

高校を退学し島内の建設会社へ就職

その後、島外の高校へ進学するため島を離れました。ただ、この進学は映画監督という夢の実現ではなく、「将来のために高校卒業の資格ぐらい取っておきなさい」という両親や担任教師に言われたことに従っただけです。映画を撮りたいという意欲自体が醒めていたわけではありませんでしたが、どんな進路を歩んでいくかについては、まったく考えてはいませんでした。人の意見に流されてばかりだったと思います。

結果、商業高校の情報システム科に進学したものの、一



島後：隠岐諸島の中でもっとも大きな島。かつては沖ノ島と呼ばれていた。平成16年に4町村が合併して隠岐の島町が誕生した。面積242.95km²、周囲151km。人口14,561人(平成29年5月現在)。全域が国立公園に指定されている。



隠岐の島町公民館制作『隠岐びとをたずねて』の撮影の様子。

独学でCG技術を学び、起業

年生の一学期に退学。行くあてもなく、島外で就職したいとも考えていなかった私は、島に戻ってゴロゴロする日が続きました。

友人の誘いで発掘調査のバイトを始めたことをきっかけに、島内の建設会社に就職。独立して現在の仕事を始めるまでの一五年間、その会社に勤めました。この間、隠岐の島町では新空港や道路建設などの公共事業が多数あり、仕事に困ることはありませんでした。夜の街にも活気があったと思います。

建設現場で働きながらも映画監督という夢はあきらめていませんでした。自分の夢と現実の狭間を行ったり来たりする日々が続きました。島にいながらにして、夢を実現する道はないのか……。

まず情報収集からはじめ、インターネットを駆使して、映像制作を学ぶ術を模索しました。そして、たどり着いたのがコンピュータグ

ラフィック（CG）の世界です。CG制作ツールを購入し、島を離れることなく独学で基礎技術を学んでいきました。

独学の場合、学校のように決められたカリキュラムのもと講師が分かりやすく教えてくれるわけではありません。基礎的な用語が分からなくて、一語一語調べながら少しずつ学んでいきました。そのため、自分が今何を学んでいるのか、分からなくなることもしばしば。試行錯誤を繰り返しながらの学習は、とても時間がかかりました。

長年勤めた仕事を辞めて独立しようと考えたのは、三〇歳を過ぎた頃。収入が断たれることに対し、不安がなかったと言えば嘘になります。しかし、いつか始めなければ夢は夢のまま人生を終えてしまう。また、夢の実現には時間を要します。『今しかない』と決断し、平成二六年、個人事業として映像制作の仕事に取り組み始めました。

自分が夢に向かって起業する姿を見てもらうことで、若い人が後に続くきっかけになれば嬉しい。やりたい仕事がないと、島外へ出ていく若者に、島で独立する道があることを示したい、という思いもありました。

町のPV制作などを手がける

起業するにあたって大変だったことは、機材を揃えるための資金調達でした。建設会社に勤めながら、給料の一部を欲しい機材の購入に充てたり、退職金に加え銀行から借

り入れをしたりしながら、少しずつ仕事ができる環境を整えていきました。

独立後、最初に手がけたのは小学校や保育所の子どもの記録映像制作です。一年間撮影した映像をとりまとめて保護者などに販売しました。このほか知人の結婚式を撮影したことをきっかけに、漁業会社からの依頼を受け、新船の建造から進水式までのドキュメンタリーを撮影したこともあります。

平成二七年度の町のビジネスプランコンテストで優秀賞を受賞したことを機に、事務所を「隠岐の島ものづくり学校」(地域資源を生かした事業などに取り組む若手起業家やクリエイターを支援するための施設。閉校となった中村小学校を利用)に移してからは、隠岐の島フィルムコミッション(ロケの誘致などによる町のPRや、観光客誘致、交流人口の拡大などに取り組む)とも連携しながら、町の自然や文化、伝統行事などを紹介するプロモーション・ビデオ(PV)の制作などを手がけています。島内での認知の高まりやいろいろなご縁もあり、仕事の受注機会は増えつつあります。特にビジネスプランコンテストによ



実写とCGを使った初歩的なVFX(視覚効果)の一例。

て、町の起業支援を受けたことで大きな投資ができたことがプラスでした。

島外からの受注を目指す

映像制作の仕事は少しずつ増えていますが、まだそれだけで生活を維持するにはいたらず、別の仕事を掛け持ちしています。やはり島内の需要だけでは、独立は難しい。島外へPRし、仕事を受注していくことが今後の課題です。

しかしながら、夢へ向けて踏み出したことは、とても大きな前進です。まだCG作品の依頼は受けていませんが、映像制作の実績を積み上げながら、CG技術のメリットや可能性を周知していくことで、仕事につなげていきたいと考えています。

映画監督という夢の実現に向け、現在、株式会社コトプロダクションが制作中の映画『GAISEN LIVE(仮)』のロケハンに同行させていただいております。監督の田中雄之さんは、平成二六年から島後において映画『Documentary of OKINOSHIMA』を制作している方です。独学では学ば



VFXにより現実にはない画面効果を実現できる。

行政からのメッセージ

◎「ビジネスプランコンテスト」で起業を支援

本町が所在する島後は、島根半島の北東約80kmの海上に位置し、隠岐諸島の中で最も大きな島です。島の外周は151km（宍道湖外周の約3倍）、面積は242.95km²（琵琶湖の約36%）で、その約8割を森林が占めています。周辺の海岸全域は、大山隠岐国立公園に指定され、雄大な海洋風景や急峻な山並みなどが風光明媚な景観を醸し出しています。さらに、豊かな自然と歴史、伝統、文化を有する貴重な島として、平成25年9月に隠岐ユネスコ世界ジオパークに認定されました。

主要産業は、農業・林業・水産業・観光業です。特に隠岐の近海を流れる対馬海流の影響を受けて、島周辺は日本有数の好漁場に恵まれており、漁業は町の重要な基幹産業となっています。

人口は、昭和30年の2万8,353人を最高に、若年層の流出、少子化などの影響で減少の一途をたどり、平成29年4月1日現在1万4,550人と、ピーク時の約半数にまで減少しています。高齢化率は38.9%です。少子高齢・過疎化、産業の衰退などの問題を抱えており、活力ある元気なまちづくりが急務となっています。

このような背景のもと、町では、地域活性化と雇用創出を目的にビジネスプランコンテストを開催しています。これは、地域課題の解決につながるビジネスプランや地域に根差して“まち”や“ひと”を元気にする計画を島内外の若者や企業などから募集し、「隠岐の島のものづくり学校」で起業する方を対象に支援を行うものです。入賞者には賞金のほか、創業に係る経費に対して補助金（補助率10/10）を交付しています。

西村さんは平成27年度開催の本コンテストで優秀賞を受賞され、平成28年4月から隠岐の島のものづくり学校を拠点に、CG技術を活用した映像制作事業（撮影・編集）を創業されました。

西村さんは、独学でCG技術を習得され、意欲を持って新分野の事業に取り組まれています。本町では高度情報通信網が整備されていることもあり、将来は「隠岐に住みながら全国を相手に事業を展開していく」という大きな構想も持っておられます。

「ふるさとに帰りたくても働く場がないので戻って来ることができない」という、島に定住を希望しても実現は難しい現状も確かにあります。しかしながら、この町にも西村さんのように意欲を持って新しいことにチャレンジする人がいるということは、とても心強いものです。このような若者がどんどん増えることを期待し、町としても、後押しができるよう支援をしていく所存です。

（島根県隠岐の島町定住対策課 課長補佐 井崎里恵子）

ことができない作品ができる過程を見ることは、大変勉強になります。いつの日か、かつての私が映画監督を志すき

っかけとなったような、観る人に楽しんでもらえる（島の魅力が詰まった）作品をつくりたいと考えています。

西村 航（にしむら わたる）

1982年島根県隠岐の島町生まれ。高校中退後、地元建設会社などに勤務。2014年、映画監督の夢を実現すべく独立し、個人事業として映像制作業務を行う。地元の伝統行事などを紹介するPVの作成やさまざまな依頼に応じた映像提供などを行っている。趣味は仕事。